

---

Listen, it's a sound of universe!

こっこ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Listen, it's a sound of universe!

### 【ZINE】

N7939Q

### 【作者名】

じつこ

### 【あらすじ】

音大生のあきらが、愛用のバイオリンと共に迷い込んだ先は……  
？ 音楽系異世界トリップです 携帯版は、1行毎の改行・空行です

ヴァイオリンはこの世界に姿を現した時、既に完成された形だったといつた。

田が落ちて暗くなつた町を、あきらは歩いていた。  
何故か今日は、「新世界」の第四楽章の冒頭が頭の中を巡つて離れない。

「新世界」の第四楽章は、ドヴォルザーク作曲。日本人なら誰でも、聞けば分かる有名な曲だ。  
それがずっと、頭の中でリピートしている。

何か特定の曲が頭にこびりつくことは今までにも時々あったが、今日のはずいぶんとしつこかつた。

大抵はこうこうことがあっても、レッスンになれば消えてしまう。他の曲を何回となく弾くのだから当然だ。そしてレッスンが終われば、そのままもう思い出すこともない。

だが今日のはどういうわけか、いつの間にか復活してくるのだ。  
何かに集中していれば消えてしまうが、気が緩むとまた頭の中を回る。

「あきら、疲れてるんじゃない？」

数少ない友人たちにそれを話すと、みな口々にそう言つた。たしかにそうかもしれない。

そして会話はこつ続いた。

「でもさ、ほーんとあきらの名前つけて、漢字珍しいよね。水晶つて書いて、あきらなんて」

「「つるさいな」

名前のことば、少々コンプレックス気味だ。今まで出会った人全員に、名前の読み方を訊かれた。

どうやらこの読み、とても難しいらしい。だつたらいつそひらがなか、ローマ字にしてしまえばよかつたのに、と思う。ただ役所に書類を出したのは父で、漢字は勝手に決められてしまった。

まあ自分に訊かれても、それはそれで困るが。

あきらは帰国子女で日本へ来てから四年になるが、漢字は苦手だ。さすがに今はよほどでなければだいたい読めるが、やはりアルファベットのまづが目に馴染む。

今でもこんな調子なのだから、帰国当時に「自分の名前の漢字を決める」と言わっても、結局は親に任せらしかなかつただろう。だからと言って何も水晶 crystal なんて字を当てなくてもいいとは思うが。

と、あきらは異変に気付いた。おかしい。

金持ちばかりが住むこの地域は residence 日本語で邸宅だつたかばかりなのだが、その中でひときわ目立つ家がある。

ピンクの壁にグリーンの屋根。庭には何やら良く分からぬ、丸っこい陶器の人形群。住人が何を考えているのかはさっぱりだが、毛色が違つことだけは確かだ。

こずれにせよ目立つので、家から駅までの田舎になる。だいたいこの家までくれば道のりの半分だ。

ただ問題は…… さつき見た気がする。

あきらは頭を振った。このところレッスン時間を増やしていくか

ら、思つてゐるより疲れてゐるのかもしけない。

そして同時にまたあの曲、「新世界」の第四楽章が聞こえていることに気づく。

( え? )

自分で考えてからはつとした。

昼間は確かにあの曲が聞こえていたが、頭の中でだ。朝CDで聞いた曲が頭にこびりついてエンドレスで巡ると同じで、耳から聞こえていたわけではない。だが今は、間違いなくどこかから聞こえていた。

あり得ない。ここは通りの真ん中で、オーケストラなど居るわけがない。誰かがCDなどを家で大音量で聴いていたとしても、歩いていれば聞こえなくなる。なのにどこからか響いていた。

自然と急ぎ足になり、背中のヴァイオリンケースが歩調に合わせて揺れる。

母の形見の大切な品だが、この程度の揺れなら大丈夫だろう。何しろヴァイオリンはケースの中でもベルトで止めてあって、そう簡単には動かない。

まだ例の曲が聞こえる中、暗い道の中に浮かぶ白い壁。それが無限に続くように見えて、あきらはせり歩調を早めた。だが。

「マジか……」

白が続く中に浮かぶ、ピンクの壁。庭に置かれた、丸っこい陶器の人形群。間違いなくさつきの家だ。

おかしい。絶対におかしい。  
さつきこの家の前を通り過ぎて、まっすぐ自宅へ向かつたはずだ。  
なのにまた、同じ家の前に来ている。  
足を止めて辺りを見回す。

いつもと変わらぬ住宅街。

そのとき、曲が少しだけ大きくなつた。  
もう一度、今度は走り出す。さつきの家へ帰つて、何か飲みもの  
でも淹れよう。それから練習中の曲をさりうて、新しい曲の譜読み  
もして……。

が、あきらはまた立ち止まつた。

ピンクの壁に緑の屋根。庭に置かれた丸っこい陶器の人形群。

「どうなつてんだよ」

言葉が闇に散る。足が動かなくなる。  
この家はどう考えても少なくとも二度目、最悪で四度目だ。だが  
一度だつて引き返したりしていい。なのにどうして、何度も同じ  
家を見るのか。

そして曲が、また少し大きくなる。

背筋を冷たいものが伝うのを感じながら、あきらは必死に考えた。  
間違いなく進んでいるのだ。それだけは神に誓つてもいい。なの  
に進めないのだとすれば。

( よし )

あきらはぐるつときびすを返した。



進めないのならば、戻ればいい。一度駅まで帰つて、タクシーを拾おう。だがそう思つて踏み出した先で、世界が「切れた」。ドアをくぐつたように、舞台で場面が変わるよう、突然周囲がぶれて消えた。

そして盛大に鳴り響く、「新世界」。

ただブラックアウトはすぐに戻り、次いで周囲のぶれもおさまる。

「どうだ、ここ」

視界に入ったのは、住宅街とは似ても似つかない石作りの部屋だった。

石組みの床に、石組みの壁。けして広くはない。机とベッドと本棚を置いたら、ソファは置けるかどうか。何とかソファを置いたとしても、テーブルは厳しい。その程度の広さだ。  
そして石の床には。

「ズラかるか」

血泡を吹いて倒れている老人を見て、そんな言葉が口をついた。それでも一応近づいて、首筋に触れてみる。痩せた身体はまだ温かかったが、脈はなかつた。

背中のヴァイオリンケースを背負いなおし、ショルダーバッグもかけ直す。

死体からはとつと離れたほうがいい。それがあきらが、過去の経験から学んだことだ。傍でモタモタしていて、殺しに関係があると思われたらたまらない。

そこまで考えてあきらは苦笑した。やはり自分は「日本人」とは

言えない。

帰国子女は他にもたくさん居るが、あきらはどびきりの変り種だ。今は御園生・ムーサ・水晶だが、四年前まではアキラ・ムーサ・ハミングウェイ。ニューヨークで歌手の母と暮らしていた。

まあ歌手と言つても町のバーで歌う程度で、当然収入などたかが知れている。だから住まいは家賃が安い、プロンクスの公爵アパートだつた。

そういう場所だから、ちょっと路地裏へ入ればとんでもないものと出合える。死体から麻薬まで何でもありだ。

だからあきらことつて、行き倒れなど珍しくもなかつた。分かつてているのは、こういう厄介なもの傍には居ないほうが多い、ということだけだ。何もしなくとも厄介ことは向こうからやって来るが、傍に近寄つて増やす必要はない。

いつの間にか、あの曲は聞こえなくなつていた。  
結局なんだつたんだろ、そう思いながら石の部屋を出て、石の階段を上がって　地下室だつたらしく　さすがに絶句する。

出た先は、半分崩れた建物の中だつた。

少し歩いてみると、荒れ果てた、だが広い庭園らしき場所へ出る。

「マジドビだよ……」

あきらは元々植物にはあまり興味がなかつたために、種類も良く知らない。ただ青い葉があつたり黄色い葉があつたり紫があつたりと、あきらが知つてゐる「生い茂る縁」ではなかつた。

ところどころ壊れた塀の隙間からは緩やかな斜面と、その先の町並みなどが見える。

遠くて分かりづらいが、この建物とよく似た石造りの一~三階建ての家々だ。どちらかと言えばヨーロッパの町並みに近く、間違つてもさつきまで見ていた住宅街ではない。

足が震えだした。

背中のヴァイオリンケースがカタカタと揺れる。

知らない、場所。

今まで意識の外に追いやっていた事実が、急に迫ってきた。  
きつとあの時、「新世界」が鳴り響いて世界が「切れた」あの瞬間、ここへ来てしまったのだ。

「冗談じゃないぞ……」

日本の生活がそれほど氣に入っていたわけではない。それでも音大へ行つてきちんとレッスンを受けられていた。衣食住にも困らなかつた。

だがこんな見知らぬ場所に独りでは、そういう了些細なことさえままならないはずだ。かつて住んでいた場所が場所だつただけに、「食うに困る」のがどういうことかはよく分かる。

あきらは急いで地下の、最初に見た部屋へ戻つた。何か帰る手掛かりがあるとすれば、あの部屋しかない。

だがそこは事切れた老人が倒れているだけで、どんなに壁を叩いてもどんなに床を探つても、何も見つけられなかつた。

さすがに途方にくれる。

もう一度外へ出でみると、さつきより口差しが弱くなつていた。  
ここでもそのうち、夜になるのだろう。

と、不意にお腹が鳴つた。

こんなときでもお腹が空くんだな……などと妙なことに感心しつつ、夕食前だつたことを思い出す。

本当なら今頃、自宅で夕食にありついていたはずだ。

(タエさん、心配してるだらうな)

自宅に通いで来てくれていたhousekeeperのことを思い出す。ちょっと太めの気のいい女性で、母親を亡くしたあきらのことを不憫がつて、ずいぶんと可愛がつてくれた。

気乗りしないまま、それでも日本に居られたのは、彼女の力も大きい。父親との関係は冷え切つたままだが、音楽と温かい食事とがあきらをあの家へ居つかせていた。

もう一度、お腹が鳴る。

(どうにかしないと……)

よく分からぬところへ来たからといって、お腹が空かないわけではないらしい。だとすれば何もしないでいたら、そのうち餓死だ。こんな場所へ来た挙句そのまま死ぬのは、さすがに免だつた。

考えてみる。

肩から掛けているショルダーバッグの中にはお菓子とガム、それにペットボトルが一本入っているだけだ。あとは教本各種、筆記具といった、大学で使うものだけだつた。

携帯電話と財布もあるが、これは意味がなさそうに思える。むしろいつも首から掛けている金の鎖と金貨　昔、母が持たせてくれた　のほうが、よほど使い道がありそつた。

あと持つてゐるのは、何よりも大切な母の形見のヴァイオリン。

( 傷、ついてないだろうな )  
急に心配になつて、ケースを降ろして開けてみる。

中のくぼみにぴったりと填まつたヴァイオリンは、ネック 細長く突き出した部分 をストラップで留めていたのもあって、まったく変わりなかつた。『も問題ない。出してA線を弾き、その音を聴きながら調弦 弦の張りを調整して音を合わせること し、さらに隣の弦と一緒に同時に弾いて音を合わせていく。

いつもの手順を踏んでいりながら、冷静になつてきた。あきらは元から現実主義だ。なつてしまつたものは仕方がない、そう割り切つて淡々と対処するのが常だつた。そのせいか、やれクールだの冷たいだと周囲は言つ。だが一方で、そういう冷静な自分をあきらは嫌いではなかつた。

何かにつけて騒ぎうるたえる女たちは、見ていて馬鹿馬鹿しい。ましてや自分がそんな風に振る舞うなど、間違つてもしたくない。それが一つ間違えば簡単に転落人生を送れるブロンクスで、あきらが学んだことだつた。

ともかく、ここぞぶつぶつついて仕方がないのは確かだ。

( よじ )

せつかく音を合わせたヴァイオリンで、一曲だけ弾いひとつ思つた。そして曲が終わつたら、あの町へ行こう。ほんの少しだけ迷つて、弾き出す。長く艶やかな音が空へ溶けていく。

「G線上のアリア」。音楽の父と呼ばれるバッハの曲だ。けして

難しい曲ではないが、ゆつたりとした曲想で数百年もの間愛されてきた名曲だ。

母も、この曲が好きだった。

母からヴァイオリンを習いだして一通り弾けるようになった頃、リクエストされた。そんなことをされたのは初めてで、だから喜んで欲しくて必死で練習した。

母の誕生日に何とか間に合わせ、一人だけの誕生パーティーで、母の前で演奏した。今思えばお世辞にも上手いとは言えなかつたのだが、母は泣きながら喜んでくれた。

あれが、自分の原点だと思う。  
だからだろうか？ 何か大きなことがあつたとき、あきらはいつ  
もこの曲を弾く。

母の葬儀のとき、日本へ行くと決めたとき、見知らぬ日本へ着いたとき。人生の変わり目に、いつもこの曲を弾いた。

そして、今も。

何が起つたのか分からぬ。これからどうなるかも分からぬ。  
だが踏み出さなければならない。

同じような気持ちになったことは、四年前にもあつた。母が死に、  
思いもかけず日本へ行くことになつたときだ。

母の葬儀の後、父親がいることさえ知らずに育つたあきらの前に、突然「父親だ」と名乗る日本人がやつてきた。そして「日本へ来な  
いか」と誘つてきたのだ。

正直「何をいまさら」と思った。そんな地の果ての国へ、しかも  
知らない男の家へ行くなどゴメンだとも思った。

気が変わったのは、その父親とやらが「音楽の勉強を好きだけさせてやる」と言ったからだ。それに親類もなく天涯孤独となってしまったあきらには、他に選択肢はなかった。だから半分仕方なく、あきらは全てを捨てて日本へ来たのだ。

僅かな荷物をトランクに詰め、ヴァイオリンを背負つて独り飛行機に乗り、ナリタに着いたあの日。見慣れない文字と聞き慣れない言葉の中、ひしひしと感じた孤独と不安。

今また、同じものを感じる。そして状況はたぶん、あのときより悪い。

だがここに座り込んでいても、きっと事態は動かない。

だからこの曲を弾いて、踏み出す。先のことは分からぬけど、歩き出せば何とかなるだろう。

高く、低く、弦楽器独特の優雅な音が響き渡る。

( え? )

音が空気を震わせ風に溶けるのは理解できる。だが、光の粒まで舞っていないだろうか？

驚いて弾くのをやめると、余韻を残して光も消えた。後に残つたのは、荒れ果てた庭園だけだ。

首をひねりながら続きを弾き始める。するとまた、周囲を光が舞う。

弾いてはやめ、やめては弾きを何度も繰り返して、どちらも「弾いている間に起こる」ことだけは分かつてきた。けれど理由は分からない。

(まあ、今考えても仕方ないか……)

こんな場所へいきなり来てしまつただけでも、十二分におかしいのだ。さらにおかしなことが、一つや二つは起つるだらう。周囲を舞つ光の粒に見とれながら、アリアを弾き終える。

「……行くか

ぎつと手入れしてヴァイオリンを仕舞い、最初と同じようにケースとバッグを背負う。

とりあえずは、向こうに見える町らしきところへ行くつもりだった。ここがどんなところかは分からぬが、ともかく人の多いところへ行くほうがいい。

歩き出す。

堀の破れ目から外へ出て丘を下ると、野原と思つたのは一面の畠だつた。ただこれも葉がいろいろな色で、あきらの知つてゐる野菜とはだいぶ違つた。ただ畝があり、植物が整然と並んでいるから、やはり畠だらう。

少し行くと、いわゆる「町並み」が広がつてゐた。人も都会ほどではないが、それなりに行き交つてゐる。

日本とは違つて、人々の髪は色とりどりだつた。茶、金、赤だけではなく、何故か水色や緑の人まで居る。けれど全体的な体格などは、そう違ひがなさそつた。髪の色さえ除けば、見た目はあきらとほほと同じだつた。

物珍しさであちこちキヨロキヨロしそうな自分を押さえ込む。こういうところでいかにも余所者といった、不安気な態度は禁物だ。ブロンクスでそんなことをしたら、たちまち良からぬ輩の力モになる。堂々としていたほうがいい。

だから真っ直ぐ前を見据えて、胸を張つて歩く。

まばらに道を急ぐ人々はだいたいがズボンにブーツ、腰の辺りを紐で止めた丈の長いシャツ、さらにその上に丈の長いベストという格好だった。みな髪は短く、ある程度の年以上の人はつばのない帽子 バチカンの同祭のものに似ている を被っている。女性も似たような格好だがシャツの丈がとても長く、脛の中ほどかくるぶしくらいまであった。

(目立つな……)

他の男性と同じように短くしてある髪はいいとして、あきらが着ているインディゴブルーのジーンズに皮のジャケットは、技術も含めてこの場ではあまりにも異質だ。しばらくは旅行者が何かで済ませられるだろうが、場合によってはこの地の服を手に入れたほうがいいかもしねれない。

そのうち人が増えてきた。どうやら中心街へ来たようで、少し先には広場も見える。  
そして気づいた。

(言葉が違う?)

道端にはいろいろな物を並べたテーブルがあり、その向こうとこちらで何かを言い合っている。どうみても市場だ。  
だがそこでやり取りされている言葉が、全く分からなかつた。

( まづいな )

言葉が通じないと「」ことがどんな不利益を引き起こすか、あきらは身を持つて知つてこる。何しろ日本へ来てまず直面したのが、

「意思の疎通が出来ない」という非常事態だったのだ。

ただ幸いあきらが話していたのは英語で、日本人は全体的に拙いながらも英語の出来る人が多い。だからたどたどしいながらも話してくれる英単語を拾い、こちらも必死に覚えた日本語の片言を繋げて、どうにかやり取りが出来た。

けれどここは、それさえも望めない。

道の隅に寄り、塀に寄りかかって考える。

人の居るところにさえ来れば何とかできると思っていたが、これでは無理だ。持っている貴金属を換金して当座のお金を、ということさえ出来ない。

まあ最悪、実力行使という手もあるが…… さすがに最初からは使いたくなかった。

「どうするかな……」

今日のところはあの荒れ屋敷に引き返して、一泊してからまた出直すか。

と、服の裾が引っ張られた。

見ると子供が興味津々と言った顔で、自分を見上げている。翠の髪に翠の瞳の、若葉を思わせる十歳くらいの少年だった。

「なんだ?」

「 # & !」

何か言つているのだが、全く意味が分からない。

「ごめん、言葉が分からなんんだ」

この状態で言つて通じるかと思つたが、少年は少し首をかしげると、得心したように一度頷いた。

そして今度は言葉を使わず、背中のヴァイオリンケースを指差す。

「あ、これか？ ヴァイオリンだよ」

少年に降ろして中を見せてやると、翠の田が輝いた。しきりに指差してはじめられた。見る。何をするものかと訊いているらしい。

「楽器だよ、つても通じないか。つと、触っちゃダメだ」

延ばされた手を押しとどめ、代わりに自分でヴァイオリンを出す。その間も少年は何度か手を出してきたが、その都度あきらに止められ、最後は「触ってはいけないもの」ということを理解したようだった。

これから何が始まるのかと、田をきらめかせている少年。そのままの前で何もせずに仕舞つことも出来ず、結局弓も取り出す。

「松脂はさつき塗ったからいか……」

緩めておいた弓の毛を戻し、あきらはA線を弾いた。ほんの少し低くなつていた音を調整し、他の弦も合わせる。

「 % \* ? 」

相変わらず少年が言つてることは分からぬが、期待されるのは分かった。

「まあ待てつて」

苦笑交じりに言つて、あきらは、ヴァイオリンを構える。

少し物悲しい、柔らかな出だし。

モンティ作、「チャルダッシュ」。早く細かい旋律が多く、極めるには相当の技巧が必要だ。だが一方で全体的に見せ場の多いこの曲は、こうこうう場にはもつてこいだった。

ゆっくりとした、寂しさを歌いあげるような前半部。そして一転して、早く激しい旋律に変わる。

続く短調の速いパッセージ。音が駆け上がり駆け回り駆け下りる。ふと見ると、また周囲に光が舞っていた。ただ今度はさつきのような柔らかさはなく、赤みを帯びた情熱的な感じだ。

(曲によって、色が変わるのが……)

どうしてこうなるかは分からないが、いろいろな曲を試してみたら楽しそうだ。

翠の少年はぽかんと口を開けて見とれていた。他にも気づいたらしい大人や子供たちが立ち止まり、聴衆となっている。

途中明るくゆつたりした部分を挟んで、また早い旋律。弦を押さえる左指と、右手の弓とが目まぐるしく動く。

最後は速度を保つたまま、長調に転じて華やかに終わった。

「！」

わっと周囲から歓声が上がる。喜んでもらえたらしい。そして開けたまま置いてあつた楽器ケースに、ばらばらと何かが投げ込まれた。

「Wow, thank you」

つい英語が出たが、やはり伝わらなかつたようだ。人々はあきらの言葉とは無関係にこちらを指さし、相変わらず謎の言葉で何事を騒いでいる。

ケースに投げ込まれたものは小さな四角い金属片だった。だが形や大きさ、それに模様が多いから、恐らくお金だろう。



(これで稼ぎになるのか……)

「ヨーヨークラークでは時々そうやって日銭を稼いでいる芸人が居たが、ここでも可能なようだ。

投げられた小銭らしきものをかき集め、持っていた財布に仕舞う。これが幾らになるかは分からないが、ともかく今晚はなんとかなりそうだ。

ヴァイオリンも仕舞つて立ちあがると、例の少年が物足りなさうにこちらを見上げていた。

「また今度な」

そう言つて頭を撫でてやる。本当ならもう少し弾いてやればいいのだろうが、ともかくお腹が空いていた。

だいぶ日が傾いてきた中、市場を歩いてみる。

「# ×%」

何かを言いながら少年がついてきたが、意味が分からぬ。だが二コ二コしているから、子供によくある「気に入つた人について行く」というヤツなのだろう。

売られているのは、生鮮食品を中心のようだ。他には服や靴、安っぽそうなアクセサリー類……平たい入れ物はお皿だらうか？そんな通りには、いいにおいも立ちこめていた。ところどころ、食べ物を売る屋台があるらしい。

においを頼りに歩いてみると、パンのようなものを売る店があつた。美味しそうだ。

「　　¥

また少年が何か言う。ひとつひとつ指をしているから、説明してくれているのかもしない。だが全く言葉が通じないのでどうしようもなかつた。

「ごめん、せつかく教えてくれてること」

そう謝つて、いちばん安そうなものを一つ取り、財布の中から安っぽそうな黒ずんだお金を出す。  
だが店主は嫌そうな顔をした。

「　　#　　」

表情と口調から見て、いぢりに文句を言つてゐるようだ。

(……足りなかつたか?)

なにしろどの貨幣がどのくらいの価値なのかも、物の値段も分からぬ。しからが出してみてを、相手が了承するまで繰り返すしかない。

仕方なく貨幣をもう一つ出そつとして　ひょいと手元を覗き込んだ少年が、いきなり喚きだした。

「　　!　　」

何かを店主に向かつて、物凄い剣幕で言つてゐる。

さらに少年が大声で周囲に何事かを言い、人々が集まつてきた。

「　　×　%　!　　」

背中のヴァイオリンケースを差し、野次馬に少年が何かを説明する。すると人垣の中からも声が上がつた。

「 & \* \$? !」

たしか、さつきヴァイオリンを聴いていた人だ。余りにも太った、しかも真っ赤な髪の女性だったので覚えている。

その女性が、人垣をかき分けて出てきて加勢した。少年を上回る剣幕で店主に言いつのる。表情と口調から見て、文句を言っているのは間違いない。

このおばさんが相手というのを少し気の毒に思いながらも、あきらはだいたいの事情を飲み込み始めた。おそらくこの店主、本来の値段より高く売ろうとしたのだ。だがたまたまついてきた少年が気がついて、騒いでくれたのだろう。

店主はたじたじだつた。大声で騒ぐ少年だけでも手を焼くのに、迫力満点のオバサンに詰めよられてはたまつたものではない。

しかも悪いことに、オバサンと顔見知りらしい女性までが加わってきて、文字通りの大騒ぎになってしまった。

( 待つか )

このまま傍観しつつパワー全開のオバサンたちの好意にすがる方が、結果がよさそうだ。

やがて店主が必死に頭を下ながら、美味しそうなパンらしきものを一つほど差し出した。オバサンたちに悪評を広められるのは嫌だつたらしい。

「 ¥ + 」

受け取った太ったオバサンが、笑顔でこちらにパンを差し出す。「ありがとうございます」

伝わらないのは承知だったがお礼を言つと、おばさんが笑顔になつた。

「# @\* ……」

何を言つてゐるかは分からぬが、好意的なようだ。そしてこち  
らに向けて手を組み、それから去つて行つた。

太つた後ろ姿を見送り、隣に居た翠の少年に言つ。

「サンキューな、助かつたよ」

少年がとびきりの笑顔になつた。褒められたのが分かつたのだろう。ただその後矢継ぎ早にかけられた言葉には、何も答えることが出来なかつた。

結局少年の方が先に諦め、あきらの手を掴んだ。どこかへ連れて行つてくれるらしい。

手を引かれるままに歩いて行くと少年は広場を横切り、別の屋台の前で立ち止まつた。何かの肉と野菜らしきものがあつて、美味しいそうな匂いがしてゐる。

「ムーチ！」

少年が声をかけると、屋台の影からやり手そな女性が現れた。

「 % \$  
「 & ×」

少年がここを切り盛りしているらしい彼女に何か言つと、すぐに食べ物が盛りつけられた皿が差し出された。

「あ、すいません。お金……」

慌てて財布を出し、小銭を渡そうとする。だが女性は受け取らず、皿だけを押しつけてきた。「食べる」とこいつことらしい。



「ありがとうございます」

耐えられないほどにお腹がすいていたのもあって、素直に受け取つて道端に座り込む。

いつの間にもらつたのか、小さめのあぶり肉を手にした少年も、嬉しそうに隣に座つた。

（これ、手でいいのか？）

フォークやスプーンは無いのかと辺りを見回したが、食べている人はみな手づかみだ。何種類もの道具を使い分けるなどという小うるさいことは、言わない文化らしい。

ならばと遠慮せずに手づかみで口に運ぶ。

「美味しいな、これ」

火を通した何かの野菜と果物らしき甘いもの、それに肉を混ぜ合つさせたものなのだが、さっぱりとしたソースが謎の材料に良くなつていて、幾らでも食べられそうだ。

空腹だったのもあって、先程もらつたパンも出して平らげる。

「美味しかったです」

言って皿を返そうとするが、また盛り付けられた。おかわりしたいと勘違しされたらしい。

かえつて良かつたが。

これ以上ないといつまでも空腹だったのと、正直なところもう少し食べたいと思っていたのだ。

あきらめの食べっぷりが気に入ったのか、屋台の女性がバンバンと

背中を叩く。それをちょっとだけ迷惑に思いながらも、一回田も平らげた。

何とか日銭を稼ぎ、お腹も満たされて、やつと気持ちが落ち着いてくる。

あきらは改めて辺りを見回してみた。

ちいさな小ぢんまりとした、町というより村だ。石造りの素朴な家々はだいたいが一階建てか三階建てで、くつつくようにして立っている。

市場があるこの広場は人通りがけつこつあるが、町の人口自体は多くなさそうだ。

事実町行く人々は、顔見知り同士が多いようだった。通行人同士もけつこう挨拶を交わしては立ち話をしているし、屋台の女性はひつきりなしに声をかけられている。

のどかな中世ヨーロッパの田舎町。全体としてそんな印象だった。あつと住んでいる人たちも、東京よりは素朴だろう。

ただそれでも、「言葉が通じない」という事態は重くのしかかつていた。

こちらの意思が伝えられないのだから、文字通り話にならない。少しでもいいから言葉を覚えるよりほかなさそうだ。

(とりあえず、あの屋敷へ戻るか……)

あきらは立ち上がった。

本音を言えば、ちゃんとしたベッドの上で眠りたいところだ。だがこの現状では、泊まる場所の確保など無理な話だった。

そういうものの、あきら自身は意外と楽観していた。幸い食べるまづは何とかなりそうだし、ここはそう寒くもない。すぐに餓死

凍死ということはないだろう。

それにもし元の世界に帰るチャンスがあるとすれば、あの場所で起ころる可能性が一番高い。だとしたら、あの廃墟を根城にしたほうがいいはずだ。

「 #¥ 」

何かを言しながらこじりあつとする少年に、あきらめ手を振った。

「また明日」

「？」

だが不思議そつな顔をしただけで、少年は離れよつとしない。

(これじゃ通じないのか……)

手を振る=さよならを意味する世界しか知らないあきらにしてみると、少し衝撃だった。

日本へ来たときも、同じように言葉が分からなかつた。だがジョンチャーチは似通つてゐるものが多く、ある程度は通じたのだ。

本当に「知らない」世界に来てしまつたといつ事實を、ひしひしと感じる。けれど今はまず、この子に意志を伝えるのが先だ。どうしようかと思つたあきらは、ふと先ほどパンをくれた、太つたおばさんを思い出した。あの時別れ際に、確かに手を組んでいなかつただろうつか？

ダメで元々と、同じしぐさをしてみる。と、少年が「なるほど」という顔をした。伝わつたようだ。

「ラダ！」

そう言つて少年が同じように胸の前で手を組んだ。そしてあきらから離れる。どうやらこれが別れの挨拶で間違いないようだつた。

(お祈りじゃないんだな……)

アメリカで育つたあきらにしてみると、胸の前で手を組むのは神に祈る場合のしぐさだ。ところ変われば……とは言うものの紛らわしいと思いつつ、町外れへと戻る。

改めて見てみると、丘の上の荒れ屋敷までは案外距離があつた。下り坂だったのと緊張していたので、気づかなかつたらしい。これは街中でどこか寝る場所を探したほうがよかつたかも知れない、そんなことを思いながらあきらは煙の中を戻った。

塀の破れ目を通り、敷地の中へ入る。それから地下へ降りようとして さすがに足を止めた。

地下室には、あの老人が倒れたままだ。さすがに死体と夜明かしするのは、あまり楽しくない。

仕方なく地上をうろついた、どうにか雨露がしのげそうな場所を見つけた。扉はないが屋根と壁はきちんととしていて、昔この住人が使っていたらしい家具が残っている。窓はガラス等はなく木の鎧戸も外れていたが、今日のところは天気がいいから大丈夫そうだ。

それと、つい最近までこの部屋を人が使っていた形跡があつた。もしかするとあの老人が、しばらくここを根城にしていたのかもしれない。

よく見ると、窓の傍にも大きな木の板がある。立てかけておけば鎧戸の替わりになりそうだ。これもきっと、ここを使っていた誰かが用意したものだろう。

「ベッド、これが……？」

2~3人は並んで寝れそうな大きな木枠に何か詰め、布をかけ

ただけのもの。だが他に寝られそうな場所は無い。

「まあいいか」

四の五の言つていられる状況ではない。床で寝ずにはすむだけありがたい、と思わなければいけないだろう。

辺りはだいぶ暗くなっていた。

丘の麓の町を見ると、宵闇の中ぼつぼつと明かりが浮かんでいた。だがあきらの知っている外灯にさえ劣る、か細い明かりだ。部屋の中もたちまち暗くなつてくる。それもあきらが経験したこの無い、真の闇だ。東京やニコニコークでは感じることさえなかつた、窓から差し込むわずかな星明りが、とても心強く思える。

(電灯つて偉大だったんだな……)

Hジソンの発明が當時どれほどものだつたか、こんなにじりで実感するとは思わなかつた。

加えて、TVどころかラジオもCDもない。音楽を聞くことさえ出来ない。

自分がどれほど凄い世界に居たかを思い知る。トウキョウでもニューヨークでも、お金さえあれば好きなときに好きな音楽がいつでも聴けた。けれどここではたぶん、楽譜と自分の耳だけが頼りだろう。

(バッハとかモーツワルトの頃は、こいつだつたわけか)

この環境であれほどどの音楽を作り上げるといつひどが、どれほどの偉業だつたかをいまさらながらに知る。何しろ録音が出来ないのでから、わずかなフレーズでも記録するのは容易ではなかつただろう。

そんな時代を潜り抜けてきた、クラシックとヴァイオリン。遠い過去と今とが、急に近づいて見える。

部屋の中は既に、目を凝らさないと何も見えないほどの闇だ。これで万一嵐などで窓を塞いだら、歩くことさえ出来ないはずだ。携帯を取り出す。長時間使わなければ、太陽光充電のアクセサリがあるので何とかなるはずだ。戯れに買ってはみたものの「別にやらなかつた」と後悔していたものが、こんなとこひで役に立つとは思わなかつた。

開くとディスプレイの光が部屋の中を照らし出す。闇に慣れた目には、まばゆいほどの光だ。

携帯の表示は当然ながら「圏外」。だが中の写真や音楽は健在だ。その写真を見ているうち、なんとも言えない気分になる。自分はこの写真の中の場所へ、帰れるのだろうか？

どん底まで落ち込んだ気分になりながら、あきらは携帯を切つた。この持ち歩ける超高性能精密機器は、温存しておいたほうがいい。

明かりが消えるとまたもとの暗闇で、もうする」ともなく、仕方なくあきらはベッドに寝転がって目をつぶつた。

興奮していく眠れないだらうと自分では思つていたのだが、ずいぶん疲れていたらしい。急に眠気を感じ、意識がそのまま吸い込まれていつた。

翌朝あきらが目を覚ましたのは、すっかり日が昇つてからだった。何時かはさっぱり分からない。ただまだ、午前中だらうとは思つ。差し込む日の光で明るくなつた室内で、あきらは持ち物をチェックした。

(無くなつてないな)

夜の間に何があつたらとも思つたが、よく考えてみれば真つ暗な

屋内だ。明かりをつけなければ移動もままならないし、そんな明かりが急に射せばイヤでも目が覚める。

こんな荒れた屋敷に寝泊りは危険かとも思ったが、案外街中よりいいかもしない。だいいちどこかで宿を取つたらお金も取られるし、そういうところのまづが泥棒も居そうだ。

当面はこの町で口銭を稼ぎながら先行きを考えよう、あきらはそう思い始めた。第一言葉が分からぬこの状態で、違う町へ行くほうが無謀だ。

その点この町は昨日の演奏の件もあって、既にいくらか顔見知りが居る。彼らから否定的な態度も取られていないのだから、ここはある程度頼るべきだ。

我ながら図々しいとは思うが、このくらいでないと異国では生きていけないことを、あきらは経験から知っていた。

昨日もらったパンを出して朝食にする。飲み物は、ペットボトルの中に残っていた紅茶で間に合わせた。

「Milk, there is a milk……」

ふとそんな言葉が口を突く。アメリカ式で、朝食には牛乳を欠かしたことがないあきらだ。やはり無いと落ち着かない。

それに今日のところはこれで間に合つたが、何とかしないと夜からは飲み物に事欠きそうだ。町へ行つたら何とかして何か飲ませてもらつて、出来たらこのペットボトルに詰めてもらわないと辛いだろ。

荷物を持って、屋敷を出る。

丘を下つていいくとちよつと奇妙な煙の中に、今日は点々と人の姿があつた。きっと畠仕事は朝にするもので、昨日は午後だったので

にもう人が居なかつたのだらう。

「ヨハー！」

あきらが歩いて行くと、たまに顔を上げて声をかけてくれる人もいた。昨日の演奏のときの観客かもしれない

「よ、ヨハー！」

掛け声を真似して返してみると、中年の男性が笑顔になる。思つたとおり挨拶の言葉だつたようだ。

「#@%」

次いで早口で何か言われたが分からぬ。仕方なくあきらは急ぐフリをして、昨日覚えた別れの挨拶をしてみた。

「ラダ」

「オー、ラダー！」

人のよさそうな顔と声とに送られて、あきらは先を急いだ。丘を下りながら同じようなやり取りを2~3回繰り返し、昨日と同じように町へ入つて歩いていく。

(あの子、居るかな)

人口がそう多いわけではないが、何しろ名前さえ分からぬのだ。あきらからは探しよがない。

昨日のことを覚えているようで、町の人々に時々声をかけられながら、あきらは演奏した場所へ急いだ。

( 居た! )

ほつとする。自分でも情けないと思つが、あの翠の少年は言葉の分からぬこの町で、唯一友人に近い存在なのだ。  
向こうもあきらにすぐ気づいて、駆け寄ってきた。

「 % #」

相変わらず、何を言つて居るかは分からないが。  
とりあえず、先ほど覚えた挨拶しきものを使ってみる。

「 パラ」

「 ！ パラ！」

ぱつと少年の顔が明るくなり、パラパラと同じ言葉を返してきました。  
どうやら間違っていないようだ。  
それから少年は、あきらの腕を掴んだ。

「ん？ まだどうか行くのか？」

昨日のことがあるので、あきらも逆りわざひとつこべ。すると  
一軒の家へ連れて行かれた。

「えつと……」「何？」

訊いたところでは、言葉が通じないから答えが帰つてくるわけも無  
い。

少年のまづはあきらに構わず、扉を叩いた。

「ヤー？」

中から声がして、女性が顔を出す。

「 \$ \* ?」

少年があきらを指差しながら何か言つと、女性がすぐに口を開けた。

「 &

何といわれているかは分からないが、ずいぶんと丁寧な扱いをされている気がする。

だが中へ誘われたあきらは、何をすればいいのか分からなかつた。ヴァイオリンとバッグを持ったまま立ち尽くす。

女性のほうはあきらと少年とを入り口に残し、一度奥へと消えた。そしてすぐに、子供を抱いて戻つてくる。

抱かれているのは薄青い髪の、可愛らしい女の子だ。年は三歳くらいだろうか？

ただ、ずいぶんと苦しそうだった。熱でもあるのか、荒い息をしながら母親に抱かれている。

と、横からつつかれた。

「何だ？」

見ると隣に居た少年が、しきりに背中のヴァイオリンを指差し弾く真似をするといつのを、何度も繰り返している。

「……弾けつてことか??」

首を捻りながらも、少年の言つとおりあきらはケースからヴァイオリンを取り出した。何が理由かはさっぱりだが、具合の悪いこの子に何か音楽を聴かせてやつてくれ、といつひじつ。

(余計悪くなつたりしないだろうな)

心配になりながらも弦の音を合わせ、構える。

(何弾くかな……)

具合の悪い子供の前で、昨日のチャルダッシュなどもつてのほかだろう。かえつて熱が上がりそうだ。

少し迷つてから、あきらはおもむろに弾き始めた。

「アヴェ・マリア」。数ある同名の曲の中でおそらくもっと有名な、グノー作曲のものだ。長い音がゆったりと続き、聖母マリアへの賛歌を歌い上げる優雅な曲だった。本当ならバッハの平均律からなる伴奏が欲しいのだが、ここに望むのはさすがにムリだろう。人の声に最も近いと言われる、ヴァイオリンの音色が響き渡る。

そして、光も。

いつの間にかG線上のアリアのときと似た、柔らかな光が周囲を舞つていた。

あきらは構わず弾き続ける。既にもう三度田で弾くといつなるのは分かつているから、演奏を止める理由にはならなかつた。

最後、高い音をゆるやかにフォルテへ、そしてピアーチシモへと下げて曲は終わつた。

曲の余韻が消えるにつれ、光も消えていく。

「 \$\*」

母親が何事か叫んだ。

(熱、上がつたか……?)

だいたい病人といつのは安静にさせて、寝て治するのがセオリーだ。なのに抱いて起こして音楽を聞かせようなんて、無茶としか言ひようが無い。

だがさすがに心配で、ヴァイオリンを持ったまま様子を見た。

(　え？)

よく見ると母親に抱かれていた子供が、先ほどのような荒い息をしていなかつた。

(し、死んだんじゃないよな……)

自分の曲を聴いて死なれたなど、寝覚めが悪いどころではない。もう一度とヴァイオリンなど弾けない。

だが母親の様子を見ていると、どうも違うようだつた。

大事な我が子が死んだりしたら、たいていの母親は半狂乱だらう。けど田の前の母親は最初だけは叫んだものの、あとは穏やかな表情で微笑さえ浮かべながら、子供を抱きしめている。

どうやら死んだわけではなさそうだと、あきらひはまつと胸を撫で下ろした。

母親が振り向く。

「@￥#」

子供を脇に座らせた彼女は、やおら床に突っ伏した。額を床にすりつけ、なおも何か言つている。

「いや、その……」

何が起こったのか、事態が全く飲み込めない。が、子供のほうを見て気がついた。

「治つて……る?」

たしかさつあは高い熱につなされて、かなり苦しげにしていたはずだ。

けれど今はうれしそうな顔で、ちよこんと床に座っている。まさかあのまま熱がある状態では、こんなふつじー口一口しながら座つていられないだろ?。

「どうなつてんだ……」

ある程度の状況は分かったが、余計に混乱する。なぜあれほど苦しそうだった子供が、あつといつ間に治つてしまつたのか。

「まさか、ヴァイオリンか?」

信じ難い話だが、それしか思い当たらぬ。

思えば少年も母親も、最初からじこで弾いてもらおうとしていた。だから少なくとも彼らは、子供の病氣にヴァイオリンが効くと信じていたのだろう。

そして弾いたら、治つた。まあ治つたこと血体は偶然かも知れないが、とりあえず筋の通りそうな話はこれしかない。

「なんか、エラいことになつたな」

ともかく治つてしまつたのは事実だ。そしてこれが広まつたら、この町中の人が押しかけかねない。ヘタをすれば、近隣の町からも来る恐れがある。

せつかく少し慣れた町だが、最悪とつと逃げ出したほうがいいかもしないと、あきらは思った。いすれにせよ、口止めしたほう

がいいだろ。

少年の肩を叩き、じかに向かせる。

「 \$@\*」

不思議そうに問われたがそれには答えず、あきらはヴァイオリンと子供とを指差した。そして次に、自分の口と少年の口とを押さえる。

何度か繰り返すうち、察しのいい翠の少年は意味に気づいたようだ。何度もうなづくと、あきらはヴァイオリンを指差しながら、母親に向かって何か言いつつ片手で唇を閉じるしぐさをしてみせた。

「この町の住人である少年に言われて、当然ながら母親はすぐに分かつたらしい。あきらに向けて同じように、片手で唇を閉じてみせる。たぶん、これがこの「言わない／言つな」というジェスチャーナのだろ」。

実は違う可能性もあるが。  
もつとも確かめようがないから、違っていてもどうしようもないのだが。

どちらにしても一件落着らしく、あきらはヴァイオリンの手入れを始めた。「こは割と乾燥した気候だから助かるが、それでも手入れを怠つたらどうなるか分からない。

その間に母親が一度家の奥へ姿を消し、両腕にいろいろなものを抱えて戻ってきた。あきらの前に並べているから、お礼らしい。

「こんなにいらないんだけどなあ……」

暮らすに困つていてるくらいだからお礼 자체はありがたいが、量によりけりだ。持っているバッグにも入らないほどの量は、正直困る。

だが母親のほうは、受け取らないと納得しそうに無かつた。

「えーと、そしたらこれ、もらいます」

出された中からパンと果物、それに硬貨をらしきものを一枚だけもらひづ。

母親はさりにこりいろ持たせようとしたが、あきらは受け取らなかつた。着ているものといい家の中の様子といい、この親子が豊かな暮らしをしているとはとても思えない。なのにいろいろもらつては、明日からの生活に困るだらづ。ニューヨークにいた頃は自分も散々困つていたから、その辺の事情はよく分かる。

バッグの中にもらつたものを詰め込むと、母親がドアを開けてくれた。帰つてもいいらしい。

「シー・ネイ、リュエ、ラダ！」

母親の足元で、すっかり元気になつた薄青の髪の子が言つた。最後の言葉は別れの挨拶だから、その前の二つの単語のどちらかが「ありがと」だらづか。

「リュエレス、ラダラトウ」

母親のほうは胸の前で手を組んで、少し違つ言葉を言つた。たぶんこひらのほうが丁寧な言い方なのだろう。

「ラダ」

別れの言葉を残して家を出る。

少年は上機嫌だつた。上手く言つたのが嬉しいらしい。そしてまたあきらの手を掴んで、どこかへ連れて行く。

大人が子供に手を引かれているようじやカッコ悪いな、とは思ったものの、振りほどくことは出来なかつた。そんなことをしたら、

たちまち困つてしまふ。  
連れて行かれたのは、今度は昨日の屋台だった。

。

「ムーチ！」

「ヤー、ハウイ？」

昨日の女性が少年に答える。

「# %」

女性に向かつて、少年が嬉しそうに何かを話している。が、途中ではつとした表情になり、あきらのほうをちらりと見た。そして慌てた様子で、女性に向かつて例の唇を閉じる動作をしてみせる。

(あいづめ、わざわざのこと言つたな。ショーガないやつ)

この女性と少年は親しいようだから、つい口が滑ってしまったのだろう。

ただ女性のほうは、あきら以上に事情が分かつていいようだ。心配ない、といふようにあきらの肩を叩くと、やはり唇を閉じるじぶさをした。黙つておいてくれるらしい。

(もしかしてああいうの、そんなに珍しくないのか?)

反応を見る限り、ヴァイオリンで病気を治すのは、ここでは驚くことではないようだ。ただみんながすぐ口を噤むのに同意するところをみると、大っぴらにやれることでもないらしい。

(呪術みたいなもんのかな)

中世の頃は 地域によつては現代でも 病を治すのは、祈祷師や呪術師の仕事だつたはずだ。

そしてここでヴァイオリンを弾くと、不思議な光が舞うのは分かっている。だからその辺から、ヴァイオリンが何か効果のあるもの

として考えられていてもおかしくない。

(だとすると、どうかにヴァイオリンの工房があるのか?)

もしヴァイオリンがそういう位置づけなのだとしたら、他にも同じような奏者が居て、作ったり修理したりするための工房もあるはずだ。

探したほうがいいな、とあきらは思った。すぐに帰れるアテが無いことを考へると、何かあつたときはその工房に頼るしかない。

幸いあきらのヴァイオリンは、つい最近弓の毛を変えたばかりだ。そしてその際に弦も張り替え、予備も買ってケースの中に入れてある。だから丁寧に使えば、あと1年は問題ないだろう。だが実際には何があるか分からぬし、1年か1年半後には間違いなくメンテナンスが要る。

もちろんそれまでに帰れれば問題ないが、もし何年単位の長期戦になつた場合には、工房のあるなしは大きかった。

そして自分が考えたことで気が滅入る。

(何年とか、「冗談じゃないな」)

自分にとつて、ここは異邦だ。少々気に入らなくても何でも、日本のはうが遙かにマジだ。

もし可能だといつなら、今すぐにでも帰りたい。なのに相変わらず、ここがどこかも、どうやつたら帰れるかも分からないのだ。

さすがにため息が出る。

氣づくと、少年が心配そうにあきらの顔を覗き込んでいた。

「シーネイ?」

やう呼びかけてくる。

「シーネーい？」

やういえば病氣だつた子も同じことを言つていたなと思つてひつ話を返すと、少年はあきらを指差した。

「シー・ネイ」

そして何か思ついた様子で、少年が自分を指差して言つ。

「ハウイ」

何のことだかと少し考へて、あきらは気がついた。やうまいにこの屋台の女性も、確かに翠の少年に「ハウイ」と言つてこたはんだ。

(名前か!)

ダメ元で少年を指差し言つてみる。

「ハウイ?」

「ヤー!」

少年が笑顔になった。

「メヌ、ハウイ。シー・ネイ?」

前半は自分を指し、後半はあきらを指して言つ少年。自分は「ハウイ」、あきらは「シーネイ」かと言つているらしい。だが否定しようとして、それさえ出来ないことに気づく。Z〇という意味の単語が分からぬ。

しばりへ導えて、あきらは自分を指差しながら答えた。

「メヌ、あきり」

「ア、キ、ラ?」

「ヤー」

ぱん、と少年が手を打つ。伝わったようだ。



「アキラ！」

「ヤー。ハウイ……アハ」

今朝覚えた、挨拶の言葉も付け加えてみる。

「ヨラ、アキラ！」

互いに笑顔になった。

こんな簡単なことに、丸一日。先が思いやられるが、それでも嬉しい。

気をよくした少年が、いろいろなものを指差しては単語を言い始めた。

「ちょ、ちょっと待つた」

言いながら慌ててノートとシャーペンを出す。

少年は見たこの無い物体に驚いたようだったが、もうつたオレンジに似た果物をあきら指差すと、思い出したように単語を答えた。

「ポルカリ！」

「なる、ポルカリか」

発音を書き留め、隣に「オレンジに似た果物」とあきらは書いた。こうしておけば後で見たときに、どの単語が何の意味だったか分かる。本当は携帯に内臓のデジカメを使いたいのだが、バッテリーのことを考えるととても使えなかつた。

その後は食べたり飲んだりしながら、少年の単語講座が延々と続いた。ただ、ほとんどが名詞だ。だからこれをすべて覚えたとしても、日常生活はままならないだろう。

あきらの経験では、意思の疎通には「／＼」、つまり動詞がかなり重要だ。最低限これが分からないと、「何をどうしたい」のかが全く伝わらない。が、この手の単語は「状況」や「行動」を表すために、訊くこと 자체が難しい。

日本語を覚えるときは、英語も出来るバイリンガルたちがアシストしてくれたが……今回は難関だ。

まあそれでも物の名前が分かつただけ、かなりの進歩だろう。と、どこかで鐘が鳴った。日が高いから正午の知らせかもしけない。

「ハウイ」

屋台の女性が少年を呼び、何かを話しかける。

「 # %」

「 !」

相変わらず謎だが、一つ一つ単語が拾えた。食べ物の話のようだ。お匂い飯だろうか？

ぽんやりやり取りを見ていると、あきらの前に皿が出された。

「り……リュウ」

ううう覚えで、それでも言つてみると、屋台の女性の顔がうなづく。

「 ¥ & -」

そしてまたバンバンと背中を叩かれた。何だかよくわからないが、褒められているようだ。

ただあきらの心中は複雑だった。

言葉が通じたのは嬉しい。けれどこの状況、困難などといつものではない。日本へ来たときのほうがまだマシだった。

傍らのヴァイオリンに目をやる。これがなかつたら、もう既に音を上げていたかもしない。早すぎると言われそうだが、そのくらいここはストレスが大きかった。

(そういうや、練習してないな)

昨日はここへ来る前、音大で散々弾いてきたあとだった。だが今日は成り行きで一曲弾いただけで、まともな練習をしていない。だが埃っぽい外での練習は、出来れば避けたかった。

(あそこに帰つてやるか……)

ここでのヴァイオリンが、どういう位置づけかはよく知らない。ただどうも、大っぴらに弾くべきものではなさそうだ。だいいちこの町には、何の曲も……。

(え?)

自分で考えて呆然とする。

思い違いでないかと耳を澄ます。

けれどその耳に聞こえたのは、町の喧騒だけだった。

(音楽が、ない?)

なぜ今まで気づかなかつたのだろう?

ニューヨークでもトウキョウでも、街中は音楽に事欠かなかつた。道端や公園で演奏している人が居たり、店の中で流れていたり。他にも鼻歌を歌う人が居たりして、人の居るところには音楽あり、というのがあきらの感覚だ。

だがここには、何も無い。

演奏する人はもちろん、歌を歌う人も、仕事の合間に鼻歌を歌う人さえ居ない。

(なんで……)

信じられなかつた。

楽譜がそこら中にあり、母が何かに付けて歌声を披露し、常にヴァイオリンが傍らにある。それがあきらの育つた環境だ。だからあきらにとって、音楽は生活の一部だ。

もちろん、他の人がそうでないのは知っている。けれどみんな醉えば大声で歌い始めたり、街中やTVで有名な曲を耳にしたりと、音楽に全く触れたことの無い人など居ないはずだ。

なのに、ここでは……。

寒さを感じて、あきらは身体を震わせた。日がさんさんと降り注いでいるのに寒い。

ニコニマークでもトウキョウでも、音楽にだけは壁がなかつた。みんなで同じ楽譜を読み、言葉が通じなくても奏でる音を競い合い、弾くもの同士は今の感情や心境を音で伝えられた。  
けれどここには、そういうものがそもそも「無い」。

ここはあきらにとって、本当の異世界だった。

ヴァイオリンのケースと、楽譜の入ったバッグを引き寄せる。今手元にある音楽は、たつたこれだけだ。

## Lesson・12

「アキラ？」

うつむいてしまったあきらを、心配したのだひつ。少年が翠の瞳で覗き込んできた。

その顔を見ながら思つ。

（この子も、何も知らないのか……）

あきらには考えられない環境で、平然と生きている人たち。

そういうものだと言えばそうだ。生まれたときから音楽がないのだから、あつたらうるさくと思つかもしない。要は言葉が違うよう文化が違うだけだ。

だが自分にそう言い聞かせて、うすら寒い気持ちは温まらなかつた。音楽の無い世界で、やれる自信が無い。

「ムーチ！」

少年が大声で屋台の女性を呼んだ。

「 \* # % ?

「 x & \$」

2人の、相変わらず分からぬ話し声。ただ途中に「あきら」という単語が入つたから、自分がことが話題のようだ。

「アキラ？」

女性があきらの顔を覗き込んだ。

薄翠の髪に、青い瞳。

青い瞳が少しだけ母親に似てるな、と思つ。

「　￥！」

彼女は何か言いながらあきらを引っ張つて立たせ、肩を貸してくれた。

「あ、だいじょぶです……」

かなりショックは受けているが、自力で歩けないほどおかしくなつては居ない。だからあきらはお礼を言つと自力で立つた。

「ハウイ」

「ヤー」

少年がバッグとヴァイオリンケースを、大事そうに持つ。女性と少年とが歩き出し、少し行つた先で立ち止まって振り向く。

「アキラ！」

こっちへ来い、といふことらしい。

屋台は放つておいて大丈夫なのかと思つたが、女性はさつさと歩いて裏通りへと入り、小さな家のドアを開けた。女性と少年とが入つていく。

「アキラ」

どうしたら良いかと戸惑つあきらを、少年が入り口で振り向いて呼んだ。入つて来い、と言つてゐるのだろう。

戸惑いながらも中へ入る。

狭い部屋。

あの荒れ屋敷にあつたような大きいベッドがひとつと、四角い木の衣装ケースらしきもの。それにかまどに調理道具らしきもの。あるのはそれだけだ。

女性と少年は部屋の真ん中へ行くと、ベッドをぽんぽんと叩いた。

あきらの荷物もここに置かれる。

(休め、つてことか?)

少し迷つて、あきらは素直に従つこととした。示されたとおりべ  
ツドに腰掛ける。

正直ここへいきなり来てしまつた時よりも、言葉が通じないと分  
かつたときよりも、今のほうがダメージが大きい。

女性が心配そうにあきらを覗き込み、何かを言いながら肩を叩い  
たが、気は晴れなかつた。

「ハウイ！」

少年が呼ばれて、女性が何かを言ひ。

それから「ここで待つていろ」というようなじぐさをした後、一  
人は慌てて出て行つた。

知らない場所の部屋に、一人。そのことを今まで以上に感じる。  
隣に置かれたヴァイオリンとバッグとが全財産だが、それ以上にこ  
の二つが重みを持つて見える。  
この世界に、他にあきらの知つている音楽はないのだ。

(中身、あるよな……?)

消えているわけは無いのだが、急に心配になる。

あきらはケースを開けてみた。

だが心配をよそに、古いヴァイオリンは相変わらずの顔をして、  
ケースの中に鎮座していた。

(当たり前か)

そんなことを思いながらもほつとする。これでヴァイオリンに何  
があつたら、とてもやつていけない。

あやめはアコリンを取り出した。

母親からもらった音叉を使って丁寧にA線の音を合わせ、他の二本の弦も響きを聞きながら調整していく。  
いつもと変わらない音。

優雅な響きを聴いているうちに、少し気持ちが落ち着いてきた。

(練習しないと……)

そういえば毎日欠かさずしてきた練習を、今日はまだしていない。バッグの中に入っていた譜面台を取り出して組み立て、教本を広げた。

スケールに始まって、セブシック、クロイツェルと、基礎練習を今までに無いほど一寧に、片っ端からやっていく。そういうこと、音楽がどこかへ消えてしまったのだ。

そうして夢中でどれほど練習しただろうか？　ふと一つの曲が頭の中を過ぎた。

(……久々に弾くか)

ヘンデル作曲、ヴァイオリンソナタ第三番へ長調。ヘンデル作ではないとも言われるが、ヴァイオリンの曲として大切なことには変わりなかつた。

四楽章からなるがどれもそう長くなく、一見簡単そうな曲ばかりだ。事実、小学生でも弾く子は少なくない。

だが「ヘンデルのソナタを弾かせると、上手い下手が一番よく分かる」と言う人もいるほど、奥が深く怖い曲だ。基礎が出来ているかないかが、この曲を弾くと一発で分かつてしまつ。

散々バッハだと難しい曲を弾きこなして音大に入ったあきらに、教授が課題として出したのもこの曲だ。

出された時は、「何でこんな曲を」と思った。けれど徹底的に基礎のやり直しをさせながら弾いていくうち、とんでもない曲だ

と認識を改めた。

まあ正確に言えば、どの曲の曲も皆、分かつてみるとどこでもないのだが……。

いざれにせよこの曲をもう一度弾かなかつたら、本当にことを知らないまま、ヴァイオリンがただ「上手いだけ」になつていただろうと思つ。

古いバロック時代にありながら、ヘンデル作と言われる曲は不思議と自由でロマンティックな雰囲気のものが多い。この曲ももちろんやうだ。

明るく伸びやかな第一楽章。音と同時に、柔らかな陽光を思わせる色があきらを取り巻いた。

音楽は、裏切らない。

そのことに安心しながら第一楽章を弾き終え、次に移る。

新緑を思わせる、軽やかな第一楽章。弾むような短いフレーズが音を変えながら何度も繰り返して現れ、時に華やかに時に寂しく彩りを変えながら変転していく。光も翠だつたり青だつたりと、音色につれて変わった。

続く第三楽章は、一転して短調だ。長く伸びる音と音階で作られた物悲しげな旋律が、形を変えながら展開する。周囲を彩る色も、秋を思わせるものに変わった。

そして第四楽章。

四拍子なのに三連符が続く、踊りだしたくなるような軽快な曲だ。ただメロディの覚えやすさとは裏腹に移弦（隣の弦へ弓が移ること）が多く、ここが出来ていないと軽快に弾けない。

軽やかに、だが丁寧に、きらきらする光を纏いながら弾いていく。

弾むよつなリズムを保つたまま最後にトリルが来て、曲は終わつた。

「アキラー！」

上がる歓声と、ひとり分の拍手。

「ハウイ……？」

いつ戻ってきたのだろう？ 少年が水差しを抱えたまま手を叩いていた。

「アキラ、リュードー！」

手を叩きながら、少年があきらの知る数少ない単語を言つ。

あきら、ありがとう。

たつたこれだけしか通じない。通じないが、言いたいことは分かつた。ヴァイオリンの音色と音楽が凄いと、数少ない言葉と身振り、それに嬉しそうな笑顔で少年は語つている。

「ハウイ……」

そう、通じている。音楽を知らないても、聞いたことが無くとも、それが「素晴らしい」とこの子は感じている。

ここは確かに、音楽のない異世界だ。  
けれど住人は音楽を知らないだけで、分からぬわけではない。

だつたら、やれる。

音楽を傍らに、やつていける。

いつ帰れるか分からぬが、その田までは片つ端から曲を書き起こし、弾いて聞いてもらえばいい。

考えてみれば昨日も、こここの住人は演奏を喜んでいた。黙つて聴いてお金まで投げてくれた。

それにあの病氣だった子には、みんな音楽を聴かせようとした。どういう理由か分からぬいが、音楽が効くという事をみんな知っていた。

だからきっと、知らないわけではない。音楽というものが、広まらなかつただけだ。

それならば、やれる。

「アキラ……？」

黙つて立つているあきらのことが、心配だつたのだろう。少年が遠慮がちに声をかけてきた。見れば翠の瞳が、不安げな色を湛えている。

あきらは少年に歩み寄ると、その頭を撫でた。  
音楽を学んできた自分と、これから知る少年。

「リュエ、ハウイ

「ヤー！」

2人は視線を合わせ、微笑んだ。

お詫び

震災、皆様の地域は大丈夫だつたでしょうか？

ドタバタして、長らく間が空いてしまつて申し訳ありませんでした。まだ計画停電でドタバタしてはいるのですが、おかげさまでだいぶ落ち着きました。

少しづつまた書いてこるので、これからもよろしくお願ひします。

あとがき

読んでくださってありがとうございます

苦手な「異世界トリップ」に挑戦してみました。

なんだかビターな感じに仕上がってしまったのは、もつ癖なのでご容赦ください（汗）

なお2~3月中旬は「ひらのほう」が、更新量が多くなりそうですが  
ルーフェイア・シリーズ共々、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7939q/>

Listen, it's a sound of universe!

2011年4月2日12時57分発行